

ISPA Japan ヤングマリナープログラム

2018 年オーストラリア・トールシップコース 報告【完全版】

2018 年 12 月 6 日

ISPA Japan では、2018 年 8 月にヤングマリナープログラムの一環として、オーストラリアでの第 2 回目となるトールシップコースをプログラム主催しました。(コース運営、管理は ISPA 公認スクールである WindValley Sailing School 及び現地トールシップセイルトレーニングで多くの実績を持つ South Passage に委託)

その概要を、その後行われましたコース参加者による駐日オーストラリア大使への「報告会」の様態と併せ、レポートします。

2018 年ヤングマリナープログラム・オーストラリアトールシップコース

本年の同コースでは、ほぼ昨年と同様、オーストラリアはクイーンズランド州、タウンズビルを 8 月 18 日に発港し (South Passage に乗り込んだのは 8 月 17 日夕刻)、全 8 泊をほぼ同数のオーストラリアと日本の参加者が船内で共同生活をしながらセイルトレーニングを受け、同州マッカイまでの延べ 256.4nm を走り切りました。

まず、セイルトレーニングに用いられたのは、South Passage という全長 30.5m のスクーターで、“To grow and develop young people through Adventure under Sail” という同団体のビジョンのもと、これまでも多くの実績を上げているトールシップです。

この船に中学生から大学生まで、オーストラリアからの参加者 9 名、日本からの参加者は 7 名が乗り込みます。これに WindValley Sailing School から派遣されたワッチ (グループ) リーダー候補 3 名が加わり、6 名のチームが二つと 7 名のチームが一つの計三つのワッチグループに分かれて 24 時間体制で、航海の始まりです。

三つのワッチグループではそれぞれ South Passage のボランティアのワッチリーダーがグループメンバーの指揮・指導に当たりますが、その他にスタッフとしてはスキッパー、セーリングマスター、アシスタントセーリングマスター、専任のコックが、それに加え今年の航海では ISPA Japan からオブザーバーが 2 名乗り組みます。

参加者の、これから始まる異文化の中でのセイルトレーニングに不安と期待の入り混じる中、8 月 17 日に South Passage に乗り込み、各ベッドでの荷物整理などが一段落し、互いの自己紹介などをするうちに先ず日本の参加者が驚いたことの一つは、オーストラリア側参加者のほとんどがそれぞれのルーツをオーストラリア以外の国に持つ人たちである、ということではないでしょうか。日本の環境の中ではなかなか気づくことがありませんが、オーストラリア現地の人たちと接することにより、オーストラリアなる国では、あるいは世界ではそれが当たり前のことかも知れませんが、そもそも色々な民族的、文化的バックグラウンドを持った人たちの集合体だ、という事実改め驚かされることになりました。



タウンズビルに停泊中の South Passage に乗り込む参加者たち



ワッチリーダーのファシリテーションのもと自己紹介が始まる

さてフネの中で初めての夜を過ごし、翌日 8 月 18 日 Day1。朝食の後、いよいよ 8 日間の航海に向けてタウンズビル出港です。

航海の様子は、参加者の体験記という形でいずれ雑誌などでも紹介されると思いますので、詳しい内容はそちらに譲りたいと思いますが、先ず初日は向かい風の中、カミングアバウトの連続です。スキッパーの考えをセーリングマスターがワッチリーダーに指示をしながらそれぞれのワッチグループのメンバーの作業を通して実行に移す、というスキムが、繰り返されるカミングアバウトの中で、だんだんと参加者にも浸透していったのではないのでしょうか。

Day 1 の錨地は Cape Creveland で、夕食前に第一回目のノットコンペティションが行われました。因みにノットコンペティションは、種目（ノット）を変えて連日繰り返されるのですが、毎朝行われるスタッフミーティングの中で、「通常オーストラリアの参加者だけだとこんなにうまくノットができないのだけれど、日本人と雪駄琢磨しながら皆がとても上達している」、というコメントがとあるワッチリーダーからありました。これぞヤングマリナープログラム、とそのコメントを聞いて嬉しかったことを思い出します。

Day 2 は、夜間航海を含めて 100nm を越える長丁場です。2 ポイントリーフを余儀なくされるクローズホールドの中、多少の船酔い者はつきものです。その後も船酔いに悩む参加者もいましたが、最終的にはそれでも皆さん楽しい思いの方がずっと強かったようです。（といっても毎朝キャビンやトイレの掃除をするのですが、さすがに走っているフネの中でトイレ掃除をすれば、だれでも酔います。まあ、

それもトレーニングの内です。)

さてさて時は過ぎ、グレートバリアリーフに囲まれた様々な錨地で夜を過ごし、オーストラリアと日本の参加者がキャビンでのトランプゲームを通して親交を深めるなか、Day 5 (8月23日)の昼、給油と食料補給のために何日かぶりにマリーナ (Abel Point Marina) にドッキングしました。久しぶりの“文化”に触れ、つかの間の時間でしたが参加者たちはそれぞれ街に出向き、アイスクリームやマクドナルドを楽しんだようです。



この後眼下に迫る真っ白な砂浜 (White Heaven Beach) に駆け出し、それぞれの時間を楽しみました。

Day 5 はこの航海の中でもハイライトの一つとなる White Heaven Beach を散策しました。

さて、いよいよ日程も大洲目、Day 7 には参加者たちが自分たちの中からスキッパー、セーリングマスター、ナビゲーター、ワッチリーダーを決め、彼らの指示に従って航海するコマンドデーが行われます。コマンドデーでは参加者たちに対して様々な課題が提供され、例えばルートや目標通過点・時刻についての指示が与えられます。

2017 年のプログラムではスキッパーとして日本からの参加者が選ばれましたが、2018 年でもワッチリーダーの一人として日本人参加者が参加者全員による互選の結果選ばれました。

そして Day 7、コマンドデーでは役回りを持った参加者たちの緊張する面もちとは裏腹に、フネは快調に目的地に向かって進み、Brampton Island 南西の湾にアンカリングしました。

途中何人かのオーストラリアからの参加者と話をする中で、「日本からの参加者の confidence level が日に日に上がっていくよね」、というコメントを聞いて、またまた ISPA Japan のオブザーバーとしては嬉しく感じた次第です。

さてご想像の通り、その夜は夕食の後フェアウェルパーティーが開かれました。日豪の参加者が入り混じり、準備をしていた余興を披露してくれ、楽しい夜となりました。

いよいよ Day 8 (8月25日)、前夜からの錨地を離れた後、マッカイに向けて南下です。既に何日も経験していながら、まだまだ船酔いは拭い去れないようです。

昼前にマッカイの港に接岸し、フィッシュアンドチップを昼ごはん、8日に及ぶ日豪合同のセールトレーニングが幕を閉じることになりましたが、マッカイでは地元のテレビのインタビュークルーが取材

に訪れていて、オーストラリアにおける ISPA Japan と South Passage の異文化交流共同プログラムにも、多くの関心が寄せられていることを理解しました。

さて、これで航海は終わりですが、日本人とオーストラリアの参加者の友情は始まったばかりです。現にこの写真の中から既に友人を連れて日本を訪れた参加者もいて、その際には日本人参加者が東京案内をするなど、交流が続いています。



(左) 航海を終え、
記念撮影におさまるプログラム参加メンバー

駐日オーストラリア大使に対するヤングマリナープログラム報告会

駐日オーストラリア大使、Mr. Richard Court は、実は根っからのヨットマンです。その大使のご厚意に甘え、11/23 には昨年と今年のオーストラリアでのヤングマリナープログラム参加者 7 名、ISPA Japan のパートナーである South Passage の Russell Shaw 氏、同じく日本で被災地の参加者たちに勉強する機会を確保すべく活躍しておられる認定 NPO「カタリバ」から三箇山氏にご同席をいただき、ISPA Japan からは理事長の Bob Sendoh、友真を含めて総勢 11 名で「ヤングマリナープログラム報告会」と称し、大使公邸に Richard Court 氏をお訪ねしました。



参加者の話に聞き入られる
駐日オーストラリア大使
(右から二人目)



駐日オーストラリア大使を囲んでの
記念撮影

参加者たちは、参加者全員が大使に語り掛ける形で、いかにオーストラリアの参加者、スタッフたちが我々を寛容に受け入れ、指導してくれたか、オーストラリアの自然やセーリングの環境が素晴らしいものであったか、また、8泊の船内での生活で、どれだけ毎回の食事が楽しみであったかなど、自らの経験をもとに全員で話をしました。

また、「カタリバ」の三箇山さんは今回学校の試験の日程と重なってしまい報告会に参加することがプログラム参加の大学生からの手紙（添付）を代読されました。



【お礼の手紙】カタリバ参加大学生.pdf

それに対して大使からは、ご自身がヨットでどのような体験をしてきたかをお話になり、また、特に「カタリバ」からの参加者の出身地、熊本にご自身が夫人とともに視察された経験もお話になり、ヤングマリナープログラムの意義と実績について、深く共感していただいたと感じています。

会の最後に大使は次のようなメッセージを参加者に送られました。

- ▶ 第二次世界大戦の折、オーストラリア、Darwin は日本からの攻撃を受けました。
- ▶ しかしながら、時代とともにその経験を乗り越え、先週、阿部首相が Darwin を訪れ、オーストラリアの首相 Scott Morrison と会いました。私もそこに同席をしましたが、これは戦争当時の関係を修復し、現在の友好関係を築いてきた歴史の大きなマイルストーンとなりました。
- ▶ そして、これからその友好関係を更に発展させていくのは、このプログラムに参加した皆さんの責任です。皆さんの今後の努力に期待しています。

12月 Sail Training International 年次総会

Sail Training International (STI) <https://sailtraininginternational.org/> はセールトレーニングを通じて若者の成長を促すのを目的とした非営利団体ですが、その年次総会がスペインはセビリアにて11/29-12/1、開催されました。

STI は 1956 年の帆船レースをきっかけに築かれた団体で、世界中の若者の相互理解と友好関係に貢献したということで 2007 年にはノーベル平和賞にもノミネートされた由緒ある団体です。今年のヤングマリナープログラム オーストラリア トールシップコースに参加した松下彩華さんが日本代表として参加、各国のユース代表と共にセールトレーニングを広めるための方法、それに必要な資産運用をどうするかなどの討論を行いました。またそれ以上にプログラムに参加したユース間の交流も深まり、今後各国のコミュニケーションも活発化していくのではないのでしょうか。